それは雪の舞い散る、寒さ深淵なる土曜日の朝だった。
深夜遅くまで仕事をしていた内山の安眠を一瞬にして破壊した、けたたましい一本の電話音。
その向こうからは、捲し立てるように吠える男の早口な言葉があった。
だれだ？何事か！
緊急の事案が発生したのか。
眠気眼に一瞬の緊張を抱きながら、未だ事態を飲み込めぬ状態。
又は早朝の悪質な悪戯電話か？
受話器から漏れる音声は、自分が中心でないと「イヤッ！」、という極めて独り善がりで特徴のある喋り方。
彼は「世界の中心がオレを呼ぶ！」等、意味不明なオーラを身体中から発散している、迷惑極まりない男の一人である。それが認識出来た時点で激しい怒りが込上げて来た。
そしてそれは、元上司でもあった。
一方的で高圧的な物腰。常識外れな時間に人の話をまるで聞かない機関銃トーク。
およそ一時間は喋っていただろうか？元上司は一呼吸を入れ、「寝ていたようだな、スマンスマン」と鼻で哂いながらそう言った。
無理やり起こされ、喋くり倒し、既に憔悴しきっていた上に人を虚仮（こけ）にしたような間の抜けた謝罪。
そう思っていたのなら何故、二・三時間置くという行為が出来なかったのか？不可思議な頭の仕組みに納得が出来ない。
徐々に無愛想な対応になる内山を余所に、エゴ丸出しの勝手三昧なお喋り屋。空気も読めないのか？幻滅したが相手には届かない。
傍若無人とは正にこの事だなと思いつつも、話の内容を要約すると以下の通りであった。
「ＰＣを立ち上げても直ぐにフリーズする！原因が判らない！！」
一分で語れる内容なので再び呆れていると、「今日、来てくれないか？」とのステキなお誘いがかかった。
他力本願にして自己中心的な態度に、憤りを通り越して笑いが生じてきた。まずい！脳の臨界点を超えたのか？不安になる。

彼もまた自作機ならぬ他作機で、やはり、ま～ったくのＰＣ音痴であった。
話し口調にもその性格が良く現れているなと、怒りと笑いとが共に感心する複雑で奇妙な心境に、不思議な次元を体現したりした。
「時が見える！」いかん、いかん！！

朝の身支度を急いで行い、朝食を適当に済ませながら今日のスケジュールを変更する。
その準備に追われながら腑と疑問に思う。
何故、自分の事でもなければ絶対的に必要な事項でもないのに、こんなにも慌しく予定も変更しなければいけないのか？
そもそも他作機を他人に作らせておいて、メンテナンスはやはり他人任せとは如何なものか？
しかも会社と自宅のＰＣ双方を同様に、他人任せにする神経がどうしても判らなかった。

納得のいかない午前八時半。
運賃も此方持ちで駆けつける不条理さ。
それを苦情として面と向かって言えない自分への歯痒さ。
ぐるぐる状態の脳内活性は、正に危機的な程、大量分泌しているように思われた。

電車に乗っていると隣のカップルは、突然に熱い抱擁を周囲に見せ付け、軽い接吻なども公開

しながら公衆の面前で有るにも関わらず、いちゃついている。
然しながら、よくもまぁ朝っぱらから粘り付けるものだと、心の中で毒を吐いたりしていた。
好奇心丸出しで半腰で見つめる若者や、怪訝な顔で今時の若者は！といった年配の冷やかな視線も浴びている。
処が突如、その若者はこちらに振り向き、「次の駅って○○っすよね」と問いかけてきたのだ。
「知るかい！ドアホ！！」と喉元まで出かけたが、「あっ！そうですね。次です次です」と笑顔で答えてしまう。
何故そうなるのか？！降り立った次の駅で、自分の不甲斐なさに悶々としながら、巨大なタイル張りの柱に額を押し付け、『別れてしまえ、別れてしまえ！』と、呪文のように繰り返す自分がいることに気付く、午前九時十二分。

場所は最寄の駅から徒歩で三十秒という、ステキな立地の本屋さんである。
店構えはとても良く出来ているのだが、人間はまったくの変乞集団である。
もう断然面白くない状態で、脳内から毒性物質が噴出しているであろう醜態を、当て付けがましく振り撒いてやろうと店の中に入るのだが、どういう訳か、「おはよーございまっす！」と空元気爆発の挨拶をかましてしまう。
その途端、心の奥底にドロドロとした、喩えようの無い怒りが込上げて来る。